

がんばろう 南三陸町

復興第79号

南三陸マイタウン情報

発行所

千葉総合印刷株式会社

本吉郡南三陸町志津川字沼田 150-84
TEL(46) 3069 FAX(46)3068

企画・編集

志津川広報センター

第2回東北被災地 語り部フォーラム 2019



南三陸ホテル観洋に 400 人集う

2月24・25日の二日間、「あの日から10年・100年・1000年先の未来へみんなが語り部」と題され、全国から語り部の皆さんが集まった。

24日の第1部では、震災を風化させないための語り部バスが運行され、南三陸町内と高野会館内部を案内した。

第2部では、フォーラム開催にあたりセレモニーがおこなわれ、南三陸ホテル観洋の副社長阿部隆二郎氏が語り部フォーラムのこれまでの歩みを話し、挨拶とした。

引き続きパネルディスカッションに入った。

神戸で当時消防士だった野村さんは、退職後に語り部となり「阪神淡路大震災」を今も語り続けていて、震災発災時の行動と心構え、そし

て語り継ぐ事で多くの人の命が救われると話す。三陸鉄道の二橋さんは、三陸鉄道の再建に努力し、震災からの地域の脱出と、元気・勇気へと繋がったという。「是非岩手の三陸鉄道に乗って下さい。」とアピールした。南三陸町戸倉の後藤さんは、震災後の現実と今を語った。震災後にワカメのいかがが再建され、それが私たちの力となった。しかし、今年はアワビ・サケの不漁が続き、名産のタコは小さく、大きくは育たないと海の異変を伝えた。フォーラム開催は、活性化となることも話した。南三陸町の入谷出身の山内さんは、子供たちが伝承している「水戸辺鹿子躍り」のことを話した。地域に伝わる子供たちの伝承は、地域でこれまでに発生した災害の「供養の舞」と話した。

最後に2018年12月8日開催の第4回全国被災地語り部国際シンポジウム in 熊本での開催報告を山地さんがおこなった。

南三陸町の当時4歳で現在12歳となった小学生の発表では、「私たちは震災を語り継いでいきます」と、自分たちの震災体験を発表し誓った。

第3部では、3つの分科会が開催され、第4部に「分科会総括報告」、第5部「レセプション(交流会)」、第6部「語り部座会」でフリートークがおこなわれた。



南三陸ブランド 若布・カキ販売



ハマレ歌津

300名限定で大盛りのカキ箱が並んでいた。その他にもワカメ販売や、しゃぶしゃぶワカメを楽しんでいた。カキ焼のコーナーでも、焼きたてのカキを待つ姿がみられた。志津川地区からの応援のお店や、たこ焼き・ホタテ・ツブ焼に来場者の列ができていた。3月に入りワカメ漁が今年は不漁で、高値がついている。南三陸町の生産ワカメの7割近くが歌津産となり、旬真っ盛りの今が食べ時、買い時です。週末はハマレ歌津へ。

南三陸町歌津地区のハマレ歌津で、1月27日日曜日に午前10時から「カキたら福まつり」が開催された。ハマレ歌津商店街入り口から、殻カキ詰め放題のテントがあり1袋1,000円のコーナーは我先にとの行列ができ、大ぶりの殻カキを袋いっぱい笑顔で詰める来場者で賑わった。



私の記憶には津波の襲来の風景は無い。津波後は地震発生ごとに地区民・家族で必ず逃げた事を思い出す。大震災の前年にも大がかりな避難が「上の山緑地避難所」で実施された。この時は自衛隊・中学生・町民が、炊き出し・救助訓練を大々的に行った。偶然かも知れないが次の年の23年3月11日に東日本大震災の津波が発生した。

津波の標柱

南三陸町志津川字本浜町の避難指定場所に、東日本大震災の津波標柱が立ちました。志津川上の山緑地は12m位だろうか。津波は16.5mで、この標柱は津波到達点を示している。記憶の継承として、町内各所に建立する。10m 嵩上げの生業の場所と、上の山緑地の海拔は変わらなくなった。

三陸道歌津北インター開通 2月16日



南三陸町歌津港地区に「三陸道歌津北IC」が開通した。仙北の本吉地区に30年かかりここまで来た。あと2年で気仙沼市までが完成する。車社会が益々加速する。高齢化

の進む被災地の復興に、交通の利便性など多くの恩恵が生まれる。

午前11時からの三陸道開通式典には気仙沼市・南三陸町の行政関係者・議員、ハイウェイ女性の会、国土交通大臣・前小野寺防衛大臣・元桜井副財務大臣を始め、国会議員・県会議員・建設関係者など、「三陸道開通」にご尽力された方々や歌津・小泉地区の地権者を含む、300名を遥かに超える人々が集まった。「南三陸町関係の三陸道の開通式出席は、これで総て終わった。」と、佐藤南三陸町町長が語り、ここまでの国・県・工事関係者・地域住民の皆様に感謝を述べた。

菅原気仙沼市長の式辞では、震災復興の三陸道の意味と、あと2～3年すると気仙沼市の三

陸道も全て開通し新たな局面に向かい喜びと不安もあると、これからの気仙沼の状況がどうなるかを述べた。小野寺氏は三陸道計画からの歩みを話し、桜井氏は仙台が近くなり、三陸道の今後の役割は大きいと語った。

三陸道の歌津北インターが午後3時に開通し、北へ北へと延伸する車の列が続いた。観光客の立ち寄りの場としての、町の期待は大きい。



歌津地区住民の感謝の言葉

(開通式にて)

寒さが少しやわらぎ明るい日差しがふりそぐ今日、町民が長らく待ち望んだ三陸沿岸道路の開通式を迎えました。たくさんのものが失われた東日本大震災からまもなく8年となるこの日、三陸町内すべてのインターチェンジが開通し希望が繋がったような思いです。この三陸自動車道はいつでも私とふるさとをつなげてくれる道でした。

高校を卒業して歌津を離れる日、見慣れた景色にほっとし、ふるさとがいつもあることに感謝した日、たくさんの寂しさや温かさに包まれてこの道を走ってきました。暗やみにぼんぼりのような道路工事の灯りが見えると、とても心強く感じました。私は大学を卒業し、春から南三陸町で農業を始めます。地場産品を使った

農園カフェを開くことを目標に、準備を進めています。たくさんの壁がありますが、そのたびに助けてくれて知恵をいただき、ずっと応援してくださる師匠がいます。そして南三陸町の人生の先輩方は、私がやってみたいことを真剣に聴いてくださり、まっすぐに私を応援してくれています。私はどうしても応援してくれる方々に夢をかなえた姿を見せたいと思っています。気仙沼市と仙台圏が、三陸道のネットワークで結ばれ流通が活発になることは私の夢を叶える大きな力となります。南三陸町とほかの町をつなげてくれるこの三陸道は、私を助けてくれる道路です。この道路を利用させていただく身として、納税の義務を果たし、社会に貢献していきたいと思っています。

そしてこの三陸道を作っているのは、全国から復興のために志願し集まった方々だと父から聴きました。その話を聴いた時、私は心のそこから感謝し、私もそういう大人になりたいと思いました。その信念は三陸道が完成し工事関係者の方々がいなくなっても、私たちの復興に向かう力となりずっと背中を押してくれる大きな手となります。この道を走るたびにそのことを思い出します。

最後に雨の日も風の日も休むことなく三陸道を作りつづけてくれた皆様に御礼を申し上げる機会をいただいたことに感謝いたします。





震災後に歌津地区に入りボランティア活動をしてくれた、東京都の慶松さんの縁で、今回は大本山知恩寺布教師会を中心に、浄土宗・曹洞宗の僧侶16名と、現役力士の豊ノ島ら3人も一緒に手を合わせに、歌津地区の牧野さんが整備した「鎮魂の森」を訪れた。

2月18日の午前中は稲淵漁港から出船し、海上で犠牲者の御霊に僧侶が読経を唱えた。午後1時からの「供養会」は、海上法要に時間がかかり、2時近くとなったものの、鎮魂の森で



の地区民の再会は、しばらくぶりの井戸端会議となり、色々な近況報告で笑いが起こっていた(東屋にて)。

青空の下に京都「知恩寺」をはじめとする僧侶の皆さんの読経が、歌津市街地から歌津湾へと広がって行く。地区民は読経に手を合わせ、静かに慰霊碑の前で家族・住民の死を噛みしめ、9年目を来月に迎えるに当たり、また一つの節目を迎えた。

ボランティア団体の御世話で、京都からの方丈様たち16人と、東京からの3人の力士が法要に立ち会った。知恩寺の神田真晃会長の挨拶に、「生ある物はいつかは死を迎える。そして、またあの世で会える」と、仏教の教えの一片を話してくれた。

供養会の終了後に参列してくれた100名の皆さんに、布教師会と力士の方々から、餅が振る舞われた。別れの時には、3人の力士と握手をしたり、だき合ったり、地区の皆さんを力付け、悲しい想いと気持ちを分け合った。

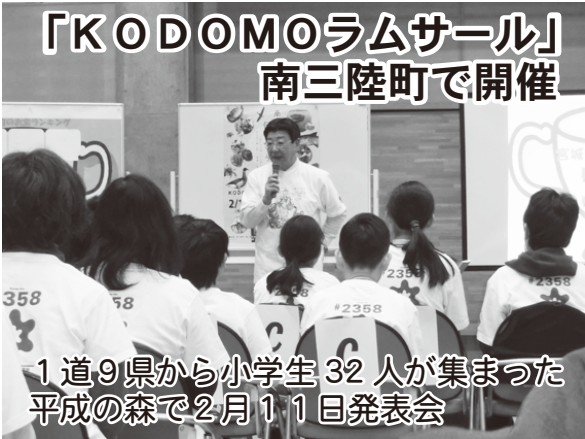
鎮魂の森の観音様の台座に、旧歌津町の伊里前市街地の姿が掲示されていた。懐かしい多くの人達がここで暮していた。あの伊里前商店街の「しろうお祭り」の賑わいを思い出し、昔の思い出が募るばかりだ。



に分け、町長・副町長・教育長ほか担当課長らが本議会同様に提案・説明を聴き、真剣に質疑応答を行なった。議場は多くのメディアと傍聴人で席はいっぱいとなった。

現在、南三陸町の被災地にある「志津川高校」は、生徒数の減少の中で、志高生が厳しい環境の南三陸町の町づくりを考えた。

町議会議場で、本番さながらに高校生の町づくりの提案がなされ、議論が交わされた。教育では「交流留学」、産業では「町の産業を生かしたブランド化」など、色々なジャンル

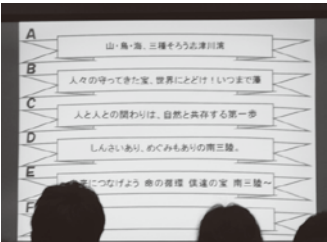


ラムサール祝賀会で集う

2月8日南三陸プラザを会場に「志津川湾ラムサール条約湿地登録」の祝賀会が開催され、南三陸町・近隣市長・環境省・安住衆議員議員・県会議員を始めラムサールの国内関係団体・町内協力者など80名余りが集まった。また今回同時期にラムサール認定を受けた、東京都「葛西海浜公園」からも3名の関係者が出席した。

概要説明では水産課の阿部拓三研究員が、志津川湾の湿地の特殊な環境を伝えた。町長の挨拶では、候補地として漁業に影響が無いかを調査した。決まった矢先に大震災が起った。環境省で2年余りの活動があり、復興のシンボルとしてラムサール条約に至った。活動として「教育交流」「環境保全」「ワイズコース」の3つを柱に、県内の他2つの登録地の市長さんと連携していきたいと語った。

2月9日の2日目の日程は、「南三陸の宝」を探す自然体験



を歌津地区の館浜漁港に於いて、歌津漁協の協力を受け、岩場に群生するフノリやヒジキなどの海藻を採取し、志津川湾の海の幸に触れた。

2月10日は、ラムサール認定登録を受けた、志津川湾の恵の体験に戸倉地区のワカメ養殖の現況を見に、漁師の漁船に乗船し、豊かに実った海から引き上げた養殖ワカメに驚きの声をあげていた。

戸倉地区では養殖施設を、震災後に3分の1に縮小し、養殖力キの生産でASCの国際認証を取得し、自然環境に配慮した漁場への変換に成功した。

2月11日午前10時から平成の森アリーナを会場に「KODOMOラムサール in 南三陸町」が開催され、町民・登録地区・関係団体で会場に設けられたイスは満席となった。

今回の南三陸町での「KODOMOラムサール」は北海道から熊本までの9湿地で37回目となり、小学校4年生から6年生の32名が参加した。南三陸町からは志小6名、名足小2名、伊里前小1名の9名が参加し、他の地区の仲間と共に「南三陸町の宝」を探し交流を深めた。

町長の歓迎のあいさつでは、「ずいぶん寒そうな顔をしていた。」と開催からの3日間の気温の低さの中での活動をたたえた。そんな中での力キ・ホタテ・ワカメのしゃぶしゃぶは美味しかったでしょうと、語った。「震災を体験して自然の力というのはすごいなと感じた。」「この機会を利用して今後に伝えるためにも、仲間を創っていただきたい。」と子供たちにもお願いした。

会議に入り、コーディネーターの中村先生が子供たちの考え・意見を引き出していく。2006

「歌津北から小泉海岸」Cまでを歩いて見学」

「三陸道を歩いてみませんか！」歌津本吉道路見学に参加した。目的は小泉の「津谷川」の大橋から写真を撮りたいだったが、子供の落下を懸念し、限られた区間のみの歩きとなった。仙台河川国道事務所の企画で、地区民100名が参加し、地区住民をドローンで撮影するというのがあり、最初に子供たちを前にして記念撮影が行われた。空に舞うドローンに手を上げる姿に、住民の念願だったと実感した。入り口の集会所は、小泉団地から歌津方向に「グリーンロード(農道)」を5キロほど南に歩いた所となっていた。大震災で平地にあった小泉地区は流失し、住民はこうしたイベントがある事で、皆が顔を合わせられる。



年に4人の子供が国際会議に参加したことも伝えた。NGOラムサールセンターでは、「子供が主役」と語られた。子供たちが見た「南三陸町の宝探し」では、自然に関わる事が大切、山と海の循環が大切、復興を祈る心が大切など、多くの意見が出された。多くの住民の皆さまとの交流で、優しさと強い力を感じたと述べた。

ラムサール湿地認定となっている9地区に、南三陸町を含めた子供たちから、自分たちの湿地の良さと環境を報告した。その後で「南三陸町の宝」として議論を交わした。

志津川湾は分水嶺があり、海と山のつながりが生活を支えている。ASC・FSCを2つ持つ事を宝にしてほしい。海と森の関わりが「生き物のため、人のため、南三陸町のため」。ラムサール・ウタツ魚竜は世界に誇れるもの。自然にたずさわる人々「人が宝」であり、人を入れたい。

子供たちの多様性の考えが発表された。「意見を言い合う事で多数決で決められるものではない。」と中村先生は話す。

ポスター作成では、1つの宝として「キリコ」を入れた方が言いという。それは復興をして来た証だからで、南三陸町と言えば「キリコ」と伝えてほしい、と言う。

最後に「宝の贈呈」と「終了証書」が授与された。

南三陸町から結婚した～い！

40代50代の初婚・再婚の女性の要望多数。一度相談ください。TEL(080-1801-6399 千葉まで)

